

フィリップ・ド＝モルネー — ユグノーによる「永遠の哲学」 —

Phillipe de Mornay
— The Perennial Philosophy Held by the Huguenot —

枝 村 祥 平 (教養教育部教授)
Shohei EDAMURA (Faculty of Liberal Arts and Education, Professor)

〈要旨〉

フィリップ・ド＝モルネーあるいはデュプレシ＝モルネー (1549-1623) は、ユグノーの指導者であり、古代のさまざまな地域における文献に普遍的な思想を見出そうとした人文主義者でもあった。彼自身は「永遠の哲学 (philosophia perennis)」という語を使用してはいないが、彼の活動はフィチーノ、ピコ、ステウコを先駆とする「永遠の哲学」の伝統に位置づけられる。本論は主として彼の著書『キリスト教の真理について』を手掛かりに、宗教改革期における思想史の転換を探る。

〈キーワード〉

永遠の哲学, ルネサンス哲学, 宗教改革, ド＝モルネー

1 序論

オルダス・ハクスレー (Aldous Huxley, 1894-1963) は、異なった地域で活躍した傑出した人物たちは「永遠の哲学 (philosophia perennis, perennial philosophy)」を共有していたとし、それはいかなる時代においても受容し継承してゆく価値があると考えた⁽¹⁾。そこまで強い主張はしなくても、比較思想に携わる学者たちは、異なる文化圏の思想を学ぶことで何か普遍的な内容をつかむことができるのではないかと、としばしば思いをはせる。「永遠の哲学」の内実を探ることは、21世紀における比較思想の展望を探ることにもつながると思われる。

さてC.B.シュミットによるとこの語を最初に使った著作はアゴスティノ・ステウコ (Agostino Steuco, 1497-1548) の『永遠の哲学について (*De perenni philosophia* 1540年出版)』である。ところが、17-18世紀に「永遠の哲学」を目指した代表的人物であるゴットフリート・ヴィルヘルム・ライプニッツ (Gottfried Wilhelm Leibniz, 1646-1716) は、この著作よりもフィリップ・ド＝モルネー (Phillipe de Mornay, 1549-1623) の『キリスト教の真理について (*De la vérité de la religion chrétienne* 1581年出版)』⁽²⁾の方が明らかに優れている、と記している。

アウグスティヌス・ステウクスは、彼の本『永遠の哲

学について』で、これらの事柄〔つまり古代教父たちやスコラ哲学者たちの異教徒論駁、ピコやロイヒリンによるカバラの援用、ベサリオンたちによるプラトンやプロティノスやディオニシオスの援用など〕すべてを十分うまく関連づけています。しかし、デュプレシ＝モルネー氏の著作『キリスト教の真理について』は、それをはるかにしのいでいます⁽³⁾。

ライプニッツが語った「優劣」をここで検証することは控えるが、少なくともモルネーはこの著作でステウコと同様に、古代ギリシアの哲学者たちだけでなくヘブライ人やカルデア人たちもまた普遍的な哲学を共有していたという趣旨の論考を、多種多様な文献を引用して展開している。のみならず、「永遠の哲学」の概念形成史をたどるとき、モルネーは単に系譜上につらなるだけではなく転換点に位置づけられる重要人物である。面白いことに、モルネーは『キリスト教の真理について』において、「永遠の哲学」という語を使っていない。その理由は容易に想像できる。モルネーはステウコの著作を知っていたが、あえて言及しなかったのである。なぜなら、モルネーはプロテスタントの一派ユグノーに属しており、カトリックの頑迷さを一貫して批判していたからである。ユグノーはカルヴァン派の流れをくむフランスにおけるプロテスタントのグループであ

り、ルター派が東フランスで有力だったのに対し、南フランスで大きな勢力を占めていた。そこに属するモルネーの立場からすれば、カトリックの護教論者でありエラスムスとルターを名指しで非難したステウコの著作を持ち上げることはできなかったのであろう。そしてこのような事情があるがゆえに、モルネーは転換点にある人物といえるのである。つまり、カトリック教会の儀礼や秘跡を介さずに、個人が神を観想し、至福を得てゆくということができるといふ思想を、彼は「永遠の哲学」の手法を用いて示したのである。

本論では、まずモルネーについての伝記的事実を整理し(2節)、『キリスト教の真理について』の内容を概観する(3節)。そして、フィチーノ、ピコ、ステウコといった「永遠の哲学」の伝統につらなる先人たちと比較してモルネーの特色を探る(4節)。

2 モルネーの伝記

フィリップ・ド＝モルネー、あるいはフィリップ・デュプレシ＝モルネー-Phillipe Duplessis-Mornayは、ラ・フォレ＝シュル＝セーヴル La Forêt-sur-Sèvreの男爵、プレシ＝マーリー-Plessis-Marlyの領主であり、神学者、外交官、ユグノーの指導者、アンリ四世の顧問官であった⁽⁴⁾。

モルネーは北フランスのマント＝ガシクール (Mantes-Gassicourt, 今日のマント＝ラ＝ジョリー) に近いビュイー-Buhyに、1549年11月5日に生まれた。父はカトリックだったがモルネーが幼いときに亡くなった。そして母と共に1559年ごろ、プロテスタントになったという。カトリックとプロテスタントの思想両方に子供時代に触れた彼は、パリで人文主義的な教育を受け輝かしい学業をおさめた後、1568年から72年にかけて、ヨーロッパ中を旅し、ドイツでも人文主義的教育を受けた。

若い頃から宗教思想とともに政治にも関心をもったモルネーは、1567年に匿名で、『プロウ諸国に対する、ローマカトリックの観点からの平和を目指した提言 *Remonstrance aux États de Blois pour la paix, sous la personne d'un catholique Romain*』を書いた。そこで彼は、改革派の礼拝を寛容に認めることは、カトリック教会の利益になると論じた。ところがこの頃既に彼は、プロテスタントとカトリック両方から招集された「聖なる、自由な、一般的あるいは国家的」評議会がひらかれるべきだと考えるようになり、さまざまに異なるプロテスタントの教派から募られた教会会議も計画するようになった。そしてモルネーは、改革派の利益のためにも、フランスの利益のためにも、ローマカトリック教会からのいかなる干渉も拒否するべきだと考えるようになった。さらに、フランスはスペイン、そしてハプスブルク家に対抗していくべきだと

も主張した。

そして、1572年には聖バルテルミの虐殺が起こる。熱心なカトリックの大貴族ギーズ公アンリ (Henri de Guise, 1550-88) の家臣たちが聖バルテルミの祝日前夜にユグノーの大物ガスパール二世ド＝コリニー (Gaspard II de Coligny, 1519-72) をパリで暗殺したことが引き金となって、民衆もユグノーたちを三日に渡り襲撃・略奪したのである⁽⁵⁾。ユグノー-huguenotとは、宗教改革の時代から革命にいたるまでのフランスにおけるカルヴァン派信徒たちの総称であるが⁽⁶⁾、フランソワ一世 (1494-1547, 在位1515-47)、アンリ二世 (1519-59, 在位1547-59) によって弾圧されたにもかかわらず異例の広がりを見せ、この虐殺において弾圧が一つの頂点に達した。モルネーは虐殺を逃れてイングランドに渡ったが、1573年にはフランスにもどった。そして1577年にはナヴァールのアンリ四世 (1553-1610) の顧問官となる。アンリ四世は後にブルボン朝初代のフランス王となるが、この頃は母のナヴァール (ナバラ) 王国のみを継いでおり、前年にプロテスタントに改宗してまもなくユグノーたちの盟主となっていた⁽⁷⁾。アンリ四世のもとではたらくことになってからモルネーは、プロテスタント諸侯からの助力を仰ぐため、イングランド、スコットランド、オランダを訪れた。

1578年には、改革派の信仰こそ敬虔で優れたものだと主張する論考『教会論 *Traité de l'Église*』を書いた。この中には、ローマ教皇は僭主のように世界を支配しようとしており、アンチ・キリストである、カトリック教会は異教的である、という強い主張もある⁽⁸⁾。

1581年の『キリスト教の真理について *De la vérité de la religion chrétienne*』は独創的な著作で、ギリシア人、ローマ人たちの著作には、イスラエルの宗教、旧約聖書に合致する真理が表現されているとしている。そして、古代哲学を吟味し、理性を駆使すれば、三位一体と魂の不死の教説を含んだ一神教にたどり着く、というのである。またモルネーは『トレント公会議の入会と布告に対する反論 *Adversissement sur la réception et la publication du Concile de Trente*』(1583) で、ローマカトリック教会からの干渉を強く退ける姿勢を再び明らかにした。

アンリ四世の強い信頼を勝ち得たモルネーは、ヴィトレ Vitre やモンタン Montauban の教会会議、またラ・ロシェル La Rochelle の政治的集会でナバラ王を代表したりした。さらに1585年と88年には、プロテスタントとカトリックの集会の布告の草案を書いた。1589年にはソミュール Saumur を統治することになり、ユグノーたちの指導者であると目されていた。

ところが1593年にアンリ四世がカトリックに改宗すると⁽⁹⁾、モルネーの地位は危うくなる。モルネーは主君の

改宗にもめげず一貫して反カトリックであり、特に教皇権や聖体変化について批判を続けた。1598年には、『古代教会における聖体の制度について *De l'institution de l'Eucharistie en l'Eglise ancienne*』を書き、アンチ・キリストと目される教皇を攻撃した。政治的には同年のナントの勅令の公布に際して、プロテスタント側の最重要人物として交渉に携わった。しかし『古代教会における聖体の制度について』の出版はアンリ四世の怒りを買ってしまったし、この書が引き金となってエヴルー-Evreuxの司教であったジャック・ダヴィ・デュペロン (Jacques Davy Duperron, 1556-1618) との公開討論会が開かれたが、モルネーは敗れたという判定を下されてしまった。デュペロンが指摘しようとしたモルネーの著書が誤っているという箇所は、討論会の前日になって知らされ、モルネーは反論の材料を揃える余裕がなかったという¹⁰⁾。

それでも、アンリ四世が1610年に暗殺された後も、モルネーは政治的活動をやめようとはしなかった。プロテスタント諸宗派にはつねに連帯をよびかけ、三十年戦争(1619-1648)が起こるまでプロテスタントの統一にも尽力した。一方モルネーはイエズス会は王に対する反逆者なので、プロテスタント諸派はつねに彼らに対抗すべきであると主張したし、1611年には『不公平な秘儀 *Mystère d'iniquité*』を書いてローマ教皇は政治的主権をなんら持ちえないと主張した。ただ彼は寛容を重視し、プロテスタント諸侯の反乱には反対したので、プロテスタントの中で妥協的、悪い意味で平和主義的だとみなされるようになり¹¹⁾、晩年はプロテスタント内での地位が低下していた。1623年に亡くなるまでの三年間はラ・フォレ＝シュル＝セーヴルの城で過ごした。

3 『キリスト教の真理について』の概要

では、『キリスト教の真理について』の概要をまとめよう。

序文は、当代が不敬虔の時代であると始まり、悲観的である。そしてそんなときにこそ、神や宇宙についての正しい認識が必要だというのである¹²⁾。正しい宗教を得ることで、神の前での人間の義務がわかり、神からの恩寵のありがたさもわかるというのである。そうしたことから選ばれた論題が本書の題だということになる。

続く序論 (preface) も、渾神がみられる当代を嘆き、エピクロスのような唯物論的哲学から距離を置いて、唯一の神が存在し、その神によって我々の魂が不死のものとして創られたと理解する必要があると訴えられる。さらに、さまざまな宗教が世界にあるなかでキリスト教の諸原理が何であるかを明らかにする必要もとかれる。そして、自ら動くものなしに世界の運動はありえないと考えれば、他を必要と

せずに作用する神がいると考えざるを得ないという。またモルネーは、無神論者、エピクロス主義者、自然主義者に対抗するため、様々な古人の思想を参照しよう、という。具体的には、ピュタゴラス、プラトン、アリストテレス、イアンブリコス、プロティノス、ボルピュリオス、プロクロス、シンプリキオスなどである。

本論は34章にわかれている。1～4章は神の存在と唯一性がテーマとなる。序論に続いてユークリッドが引用され、確実な知識がそれに基づいてもたらされる原理があると確認される。そして自然の諸事物の運動をみると、それらをつくり導くような至高の精神がなければならないとされる。古代人たちが、地域は違えどもみな「神性 (divinité)」について語っているとも指摘される¹³⁾。そしてすべては共通の根 (racine) から出ているのであり¹⁴⁾、すべての原因としてただ一人の神を措定せざるをえないのである。マニ教の善悪二元論を論駁するためにアウグスティヌスがひかれたりもしている¹⁵⁾。またヘルメスも (ヘルメス文書が本当に彼によって書かれたのかという疑いをむけながらも) 神の一性を示しているという¹⁶⁾。以下、ピュタゴラスからシンプリキオス、セネカにいたるまでの古代の賢人たちの思想が検証される。そしてまた、人間には他の動物にない、神を知るという能力が備わっているという¹⁷⁾。神には完全な力 (puissance) と知性 (entendement) がある¹⁸⁾。神は善であり、正義をともなった摂理により宇宙をおさめる。神は不動 (immobile) で非物質的であり、天使たちを従える¹⁹⁾。

5～6章は三位一体がテーマである。我々が太陽の光によって太陽および他のものを見るように、神なしに我々は神もその他のものも知ることはできない²⁰⁾。無限の神は、無限な知性をもつが、この知性は神自身を照射し、「子、御言葉」と呼ばれる父なる神の完全な似姿であり、神の知恵 (Sagisse) である²¹⁾。そして天からの啓示によって我々は、神に三つの位格 (personne) があると知る。もろもろの結果から、神のきわめて単純な能動的力能 (vertu active) という本性がわかり、原理、創造主である神、父なる神がみえてくる²²⁾。また、知性が鏡のように神自身を映し出すことによって、子、御言葉という位格もみえてくる²³⁾。また、知性ととともに特定の善に向かう意志があることで、第三の位格、神の霊 (l'Esprit de Dieu)、聖霊 (le S. Esprit)、がでてくる。6章では古代人たちの説のなかに三位一体にそぐうものがあるとされ、ゾロアスター、ヘルメス、プラトン、プロティノス、イアンブリコス、プロクロス、アメリウス、マクロビウスなどが引かれる。さらにシモン・バル＝ヨバイなどユダヤの学者もひかれる。

7～10章は世界の創造がテーマである。7章では、我々は知性をもつのだから、世界の感覚的な対象だけでなく、

それを越えた創造者、神にも思いをはせることができるという²⁴⁾。また、四季の移り変わりなどをみると世界に永遠のものはないし、移り変わりの運動にははじまりがなければならぬので、それをもたらしたのが神だというのである。8章ではいつ世界が創造されたかが論じられ、芸術、法、都市といったものは必ず起源があることにも触れられる²⁵⁾。9章では古代人たちが世界の創造を認識していたことが確認され、モーセがヘルメスが星・惑星が神の御言葉を介してつくられたとし²⁶⁾、オルペウスが天も地も海も神に創造されたとしていること²⁷⁾などに触れられる。10章では、神が無から世界を創造したのであり、創造以前には何らの物質ないし質料も存在しなかったと論じられる。

11～13章は神の摂理がテーマである。神を知性なしに力をふるうもの、善を度外視して意志をもつものとみえることは、いわば「神性なしの神性 (divinité sans divinité)」を考えることになってしまう²⁸⁾。知恵は、必ず何らかの目的・終着点 (fin) を目指しているものである²⁹⁾。だから、創造者としての神を考えるならば、神の摂理も必ず考えなければならない、とされる。12章では世界における悪もまた、神の摂理のもとにあることが解かれる。善とみえるものが悪に貢献することもあるし、悪にみえるものが善に貢献することもあるのである³⁰⁾。13章では古代人たちが摂理を認識していたことが確認され、ヘルメス、プラトン、アリストテレス、ポルピュリオス、アレクサンドロス、シネシウス、シンプリキオスなどがひかれ、運命論批判もなされる³¹⁾。

14～15章は魂の不死がテーマである。人間の身体は四大元素が集まったものであり、神経などが形成されている³²⁾。そのうちには魂があり、植物的、動物、精神的な三つの働きをもっている³³⁾。魂と身体 (物体) は同一の存在ではなく³⁴⁾、魂だけで一つの実体である³⁵⁾。魂は非物質的であり、物体が量を介して形相を受け取るのに対し魂は純粋な質をもつ³⁶⁾。15章では古代の哲学者たちが魂の不死を認識していたと論じられ、ヘルメス、ゾロアスター、ピュタゴラス、プラトン、キケロ、オウィディウス、セネカ、ポルピュリオス、ヘロクレス、エピクテトス、シンプリキオスなどの考えが確認される。

16～17章は人間の墮落する本性がテーマである。動物たちは植物に優越するが、人間は他の動物に優越し、世界は人間の使用に供するものである³⁷⁾。そして人間は、創造主である神に対しての義務をはたさなければならないが、恩寵を濫用して他の動物にはなしえない悪をまなうるとされる³⁸⁾。17章では古代人たちが、人間の墮落する本性に関してモルネーの説に一致するような考えを持っていたことが確認される。アリストテレスの倫理学書、プラトンの『パイドン』、エンペドクレス、ピュタゴラス、(ピコモ

引用している) ゾロアスターの言葉、ヒエロクレス、プロティノス、アウグスティヌス、シンプリキオスなどがひかれる。また、神が善かれと思って与えた自由意志を使って人間が罪を犯してしまうことについて独自の考察がなされる³⁹⁾。

18～20章は究極目的としての神がテーマである。18章では神は人間にとっての至上の善 (sovereign bien)、主要な目的 (principal but) だとされる。意識的に何かを目指す人間にとって、目的と善は同じものである⁴⁰⁾。ところで世界は感覚的なものに過ぎず、人間にとっての目的ではない⁴¹⁾。精神が人間の形相であるように、神の認識は人間知性の真の形相なのだ⁴²⁾。そして神の認識こそ、人間にとっての真の幸福 (felicité) をもたらす⁴³⁾。19章では、偉大な賢人たちが神を主要な目的あるいは善として認めていたことが確認され、ストア派、アリストテレス、ポルピュリオス、アレクサンドロス、アヴェロエス、プラトン、ピュタゴラス、ヘルメス、ゾロアスター、イアンブリコス、プロティノスが引用されている。20章では、真の宗教とは至上の善あるいは目的にたどり着くための道に他ならず、宗教 (religio) とはラテン語の語義からして、主とわれわれとの和解 (reconciliation) でなければならない⁴⁴⁾、とされる。また、フィチーノがはじめの神学者たち (premiers Theologiens) について語っていたことにも触れられる。そしてモルネーにとっての古代の偉大な神学者として、ヘルメス、プラトン、アリストテレス、アレクサンドロス、エピクテトス、シンプリキオス、ヒエロクレス、プロクロスなどが挙げられる。また、宗教とは決して儀礼に解消されるものではなく⁴⁵⁾、真の宗教は直截的に人間を救済 (salut) に向かわせるものであると主張される⁴⁶⁾。

21～25章はユダヤ＝キリスト教の歴史が論じられる。21章では、真の宗教とは、イスラエルで最初に崇められた神をあがめるものだと主張される。真の神は天地を創造し、被造物を自らの意志に向けて導く⁴⁷⁾。そうした神を、イスラエル人以外の民族はきちんと認識できていなかったというのである。22章では、異教徒が崇めている神々が論じられ、フェニキア人、ギリシア人、ローマ人の神々とともに、神格化されたアレクサンドロス大王やローマ皇帝などが挙げられるが、いずれも真の神ではないとされる。23章では、悪魔 (diable) あるいは悪霊 (malins esprits) が論じられる。24章では、イスラエルで与えられた神の言葉を規則として採用しているかどうか真の宗教の条件だとされる。25章では、旧約聖書に書かれた出来事の展開は神によるものとししか考えられないと論じられる。患者が理由もわからずに医者に導かれ、学童が教師に導かれるように、人々は神の意志に導かれたのである⁴⁸⁾。

26～33章は異教徒論駁が試みられる。26章では、聖書の

みが神の御言葉を記したものであり、ギリシア人やローマ人の著作には御言葉は見いだされないとされる⁶⁹。聖書のみが、天地創造、最初の人間とその堕落、洪水、イサクの犠牲などについて十分にいきいきと伝えるのである。27章では、真の宗教の三つ目の、最後の特徴が語られる。モルネーによればそれは、人間の救済および贖罪についてのただ一つの真なる手立てが語られている、という点にある⁶⁹。それは、神の子ないし救世主を介したものに他ならない。28章では、神と人間の仲介者つまり救世主が来ることが聖典では約束されていなければならず、救世主は人間の肉体をもった神の永遠の子であると主張され、旧約聖書とともにタルムードやカバラ学者が引用される。また26～28章の総括として、宗教には真の神、神の法、神の子ないし救世主に関する教説が必要だとされる⁶⁹。29章では、救世主の到来のときが聖書だけでなくユダヤ人の言い伝えにもあらわされているとされ、ミリ、エリエゼル、シメオン、ヨハナン・ベン・ザッカイ、モーセ・ハダルサン、アキバ・ベン・ヨセフなどのラビに言及される。30章では、マリアの子イエスの到来のときが聖書に記されており、彼こそが救世主であることが確認される。またこれに関連して、ラビやタルムードに言及される。31章では、イエスは救世主とは認めないユダヤ人の主張の論駁が試みられる。例えば、イエスがなぜパリサイ人たちに認められなかったのかとか、なぜ辱めを受けたのかといった疑問が扱われる。32～33章では続いて、イエスキリストが神であるということを確認しない異教徒の論駁が試みられる。

34章では、福音は神の子イエスの本当の逸話、教えを含んでいることが確認される。新約聖書を記した使徒たちを信頼すべきことが強調されたのち、各章の総括が記されて終わる。

4 フィチーノ、ピコ、ステウコとの比較

以下ではモルネーの議論を、フィチーノやピコ、ステウコといった、古代の哲学者たちのうちに時代を超えた普遍的な哲学を見出した人物の議論と比較対照することにする。

まず、モルネーはフィチーノらの先人たちと同様、理性に対して信頼を置いている。これは哲学者として当然のこと、で済ませられることではない。というのも、モルネーはプロテスタントの論客でもあるが、宗教改革の嚆矢となったルターは理性を「悪魔の娼婦」とまで罵っているからである⁷⁰。ルターにとって、理性は、信仰の手綱がなければ、あれこれの事柄を比較しては神が福音で伝えた真理から人間の心を遠ざけてしまうので、極めて慎重に扱うべき能力なのであった。これに対してモルネーは、人々が理性によってキリスト教の諸真理に対する確信へと導かれると

いう多少楽観的な見込みを持っていた。だから彼は、理性を駆使した議論によって無神論者を信仰へと導くこともできると考えていたのである⁶⁹。こうした、プロテスタントに所属しつつ理性を重視し、党派を超えた真理に到ろうとする姿勢は、グロティウス（1583-1645）やライプニッツにも受け継がれる⁶⁹。

また、モルネーも先人たちのように、様々な地域の古代人たちの言葉に普遍的な真理が表現されていると考える。例えばフィチーノは、ゾロアスター、ヘルメス、オルペウス、アグラオパモス、ピュタゴラス、ピロラオス、プラトンを、もっとも正統的な思想をルネサンスの時代にまで伝えた「いにしへの神学者たち（prisci theologi）」として列挙している⁶⁹。モルネーもまた、前章でみたようにゾロアスターなどを普遍的な哲学を提示した人物とみなしている。ただモルネーはそうした人物たちの範囲を七人に限定せず広く解釈しており、この点ではフィチーノよりもピコやステウコに近い。

ただ一方でモルネーは、ピコやフィチーノが正統の思想を保持していたと認めた人物たちの問題点を指摘したりもしている。例えばモルネーによれば、オルペウスは依然多神教的であり、ユピテルが父を追いついてオリンポス山に君臨するさまなどを描いているが⁶⁹、それが真の神の振舞いとは思えないというのである⁶⁹。またプラトンやプロティノスについても慎重な扱いをしており、例えばプラトンが三位一体を示唆しているとされている手紙については、異端とされるアリウス派に似たところもあるがそれよりましだと書いている⁶⁹。またプロティノスについては、彼のいう世界靈魂は聖霊であると解釈する一方で、プロティノスは聖霊のあり方についてナジアンゾスのグレゴリウスほど判明に語っていないとしている⁶⁹。

さらに、転換点に位置づけられる人物であることもあって、モルネーには先人たちと異なる特徴がみられる。第一に、モルネーは先人たちほど、ヘルメス文書などに信頼を置いていない。ヘルメス文書とは、エジプトの学問神とみなされていたヘルメス・トリスメギストス（三倍偉大なヘルメス）の言葉を集めたものとされていたテキスト群である。モルネーは、前節でみたように古代の文書がいつ作成されたかは必ずしも明らかではないことを認めたのである⁶⁹。ただそれでもモルネーは、ヘルメス文書が普遍的な哲学を表現したテキストだという信念を持っている。つまり、ヘルメス文書はモルネーによれば、後代の人間が学問神ヘルメスに仮託して真理を語ったテキストなのである⁶⁹。

第二に、モルネーはフィチーノやピコほど人間を導くダイモーンについて語らないし、またステウコほど天使たちについて積極的に語らない。例えばステウコはディオニ

シオスによる天使の位階分類に言及し詳細に論じているが⁶²⁾、モルネーは単に神は天使たちを従えたとそっけなく確認しているだけである。そして、確かにモルネーは悪霊についても語るが、それは人間の堕落傾向や原罪について警告する意図である。

第三に、モルネーは、フィチーノやピコ以上にモーセの別格性を強調する⁶³⁾。つまり、ギリシアの哲学者たちが、より以前の時代に真理を伝えたモーセの影響を受けていることを強調するのである。『キリスト教の真理について』においてステウコの『永遠の哲学について』以上に顕著なのは、キリスト教徒たちの正当性の強調とその外部との差別化である。その意図のため、古代ギリシアが栄える以前に啓示を受けたモーセの重要性が際立たされるのである。この姿勢はラルフ・カドワース (Ralph Cudworth, 1617-1688) などに引き継がれるだろう。

第四に、モルネーは、フィチーノやピコのように魔術について積極的に語らない。のみならず、ステウコのように特定の儀礼（つまりカトリックの儀礼）を、一般人の宗教心を保つ上で特権的なものとして語らないのである。後にモルネーは1599年及び1604年に出版された『聖体論』にお

いて、教父ユスティノスが我々は伝統に従わなければならないのではなく（使徒たちによって聖書に伝えられた）神の命令に従わなければならないのだ、としていることに触れている⁶⁴⁾。そうして、『キリスト教の真理について』以降、カトリック教会の司教・司祭たちによる儀礼が独占的に救いをもたらす特権をもっているわけではないことを指摘してゆくのである。

5 おわりに

キリスト教徒の特権を強調するモルネーの姿勢は、ステウコ以上に顕著ではある。その意味で、クリスチャンの共同体の外部をも包摂する「永遠の哲学」を志向する後世の人物たちからみれば、姿勢が十分に包括的ではないと見えるところもある。ただカトリックとプロテスタント諸派の人々が共有すべき、真の宗教心、敬虔な心を提示しようとした姿勢は、包括性への志向を明らかに含んでいる。そしてその志向は、新旧教会の合同を模索したのみならず、中国などキリスト教世界の外部でも普遍的な神学が共有されていることを示唆したライプニッツなどに受け継がれていくのである⁶⁵⁾。

注

- (1) Huxley, 1946; Samsel, 2011参照。
- (2) なお『キリスト教の真理について』は1586年にフィリップ・シドニー (Phillip Sidney 1556-86) とアーサー・ゴールディング (Arthur Golding 1536-1606) による英訳が出版され、1617年までに再版もされたという。Cotter 2004参照。
- (3) “Augustinus Steuchus fit un enchainement assez joli de toutes ces choses dans son livre De Perenni Philosophia. Mais l'ouvrage de Monsieur du Plessis Mornay de la verité de la Religion Chrestienne le surpassa de beaucoup;” GP3.191引用箇所は1697年2月に書かれたトマス・バーネット宛書簡からのものである。
- (4) 以下、モルネーについての伝記的事実は主として Turchetti 1996及びPenn 2002に依拠してまとめた。
- (5) 高澤 1996, pp. 132-133参照。
- (6) 平凡社『世界宗教大事典』1956頁、ユグノーの項参照。ユグノーはギーズ党がカルヴァン派に対して用いた僭称なので、フランスでは「改革派réformé」と称するのが一般的らしいが、本論では日本の慣例に従いユグノーとする。
- (7) 高澤1996, p.118, 129参照。
- (8) マリオ・トゥルチェッリは、モルネーが1579年の『暴君たちに対抗する主張 *Vindiciae contra Tyrannos*』の編集にも携わった可能性がある、としている。Turchetti 1996, p. 12参照。Cf. Henreckson 2016
- (9) 高澤 1996, p.148
- (10) 高橋 2013, p. 64参照。高橋薫によると、モルネーは不利な状況で討論会を迎えたくなかったため10日間の猶予を願い出たが、アンリ四世がこれを許さなかったという。
- (11) 高橋は、プロテスタントによる闘争の歴史を記した『世界史』の著者であるアグリッパ・ドービニエ (Théodore Agrippa d'Aubigné 1552-1630) がモルネーを「宮廷に接近する改革派指導者」とみなし、彼に対して憎悪の念を示していることに触れている。高橋 2009, p. 361参照。
- (12) 余計なことを書き添えると、危機の時代こそ最高の教えをというスローガンを打ち出すこのくだりは、本邦における平安時代末期や鎌倉時代を連想させる。
- (13) VC.1.14
- (14) VC.2.17
- (15) VC.2.26-27
- (16) VC.3.27-28
- (17) VC.4.45
- (18) VC.4.46
- (19) VC.4.48-49
- (20) VC.5.53
- (21) VC.5.55
- (22) VC.5.53-55
- (23) VC.5.55-56
- (24) VC.7.93
- (25) VC.8.105
- (26) VC.9.125-126
- (27) VC.9.126-127
- (28) VC.11.163
- (29) VC.11.166
- (30) VC.12.180
- (31) VC.13.208-210

- (32) VC.14.213
 (33) VC.14.215
 (34) VC.14.219
 (35) VC.14.221
 (36) VC.14.224
 (37) VC.16.278 cf. Walker 1972, p. 141
 (38) VC.16.281
 (39) VC.17.304
 (40) VC.18.307-308
 (41) VC.18.309
 (42) VC.18.312
 (43) VC.18.321-322
 (44) VC.20.334
 (45) VC.20.340
 (46) VC.20.342
 (47) VC.21.349
 (48) VC.25.412
 (49) VC.26.430
 (50) VC.27.458
 (51) VC.28.491
 (52) ルター著作集第6巻208 頁および李2002, p. 119 n.31参照。
 (53) Walker 1972, p. 148
 (54) Walker 1972, p. 192
 (55) TP.12.1.14, O.2.1826参照。
 (56) VC.22.367
 (57) Walker 1972, p. 33
 (58) VC.6.87-88 Walker 1972, p. 41参照。
 (59) VC.6.83 Walker 1972, p. 121参照。
 (60) Walker 1972, p. 18 後の1614年にイザク・カゾボン (Isaac Casaubon 1559-1614) は文献学的考察により、ヘルメス文書が2-3世紀ごろに成立したテキストであることを指摘した。Walker 1972, p. 195 Copenhaver and Schmitt 1992, p. 18
 (61) アントワヌ・フェーヴルは、モルネーがヘルメス文書に表現されている思想に「すべての宗教的軋轢を超えた宗教的立場」を見出した、としている。Faivre 1986, p. 298参照。
 (62) DPP.8.8-13
 (63) Walker 1972, p. 72
 (64) 高橋 2013, p. 101
 (65) 本稿はJSPS科学研究費(課題番号:20K0018)の助成を受けている。

略号

DPP = Agostino Steuco, *De philosophia perenni*, Cited by book and chapter.
 GP = G.W. Leibniz, *Philosophische Schriften*, Cited by volume

and page.

O = Marcilio Ficino, *Opera Omnia*. Cited by volume and page.

TP = Marcilio Ficino, *Theologia platonica*, Cited by book, chapter and section.

VC = Phillipe de Mornay, *De la vérité de la religion chrétienne*, Cited by section and page.

参考文献

- Copenhaver, B. P. and C.B. Schmitt (1992) . *Renaissance Philosophy*. New York, NY: Oxford University Press.
 Cotter, J.F. (2004) . "The Inshape of Inscap" *Victoria Poetry* 42(2), 195-200.
 Faivre, A. (1986) . "Hermetism" In *The Encyclopedia of Religion vol.6* (pp. 293-302) . New York, NY: Macmillan & Co
 Henreckson, D. (2016) . *The Immortal Commonwealth: Covenant, Law, and the Common Good in Early Modern Protestant Thought*. Ph.D. Dissertation Princeton University.
 Huxley, A. (1946) . *The Perennial Philosophy*. London: Chatto & Windus
 Penn, D.R. (2002) . "Philippe Duplessis-Mornay" In *New Catholic Encyclopedia 2nd Edition Vol. 4* (p. 944) .
 李良浩 (2002) . 「ルター神学の構造」『基督教研究』64(2), 109-120.
 マルティン・ルター (1963-84) . 『ルター著作集』聖文舎
 Samsel, P. (2011) . "Perennial Philosophy." In M. Jürgensmeyer & W.C. Roof (Eds.), *Encyclopedia of Global Religion*. Newbury Park, CA: Sage Publications.
 Schmitt, C. B. (1966) . "Perennial Philosophy: From Agostino Steuco to Leibniz," *Journal of the History of Ideas*, 27 : 505-532.
 高澤紀恵 (1996) . 「宗教対立の時代」柴田三千雄, 樺山紘一, 福井憲彦 編『フランス史 2』山川出版社 113-152頁
 高橋薫 (2009) . 『歴史の可能性に向けて』水声社
 _____. (2013) . 「デュプレシ＝モルネ『聖体論』『序文』のヴァリエーション—きたるべき校訂版のために(1)—」『仏語仏文学研究』45, 61-112.
 Turchetti, M. (1996) . "Philippe Duplessis-Mornay" In H.J. Hillebrand ed. *The Oxford Encyclopedia of the Reformation II* (pp. 11-13) . New York, NY: Oxford University Press.
 Walker, D. P. (1972) . *Ancient Theology*. London: Gerald Duckworth.

